

# 「満州事変前後の世論についての一考察」

## A Study on Public Opinion Before and After the Manchurian Incident

井上佳子

Keiko INOUE

851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1

長崎県立大学 国際社会学部 国際社会学科

Department of Global and Media Studies, University of Nagasaki,

1-1-1, Manabino, Nagayo-cho, Nishisonogi-gun, Nagasaki Prefecture 851-2195, Japan; inoue28@sun.ac.jp

日本の新聞が戦争遂行に大きく舵を切るきっかけになったのは、1931（昭和6）年の満州事変だと言われる。著者の祖父、井上富廣は、ちょうどこの時期に日記を書いている。満州国の建国を喜び、国際連盟総会から退場する松岡洋祐に喝采を送る富廣。日記は時代の空気を映している。本論では、この日記や当時の新聞報道をもとに、世論と戦線の拡大との関わりを概観したい。

キーワード： 満州事変, 新聞, 世論

## 1. はじめに

日本が、日中戦争、それに続く太平洋戦争に向かう曲がり角となったのは、1931（昭和6）年の満州事変である。日本の新聞の論調は、この満州事変を境に、戦争の遂行に加担する方向に大きく舵を切ったと言われる。

ちょうどこの時期、著者の祖父は日記を書いている。井上富廣は、1911（明治44）年、熊本市郊外の農村、飽託郡藤富村（現在の熊本市南区会富町）に生まれた。耕作していたのは6反で、主に米、麦の二毛作である。

1937（昭和12）年8月、第6師団歩兵第13連隊の衛生兵として応召。翌1938（昭和13）年7月、中国安徽省大湖付近の戦闘で、頭に銃撃を受けて戦死している。26歳だった。

残っている日記は、出征前の1930（昭和5）、1932（昭和7）、1933（昭和8）、1934（昭和9）年の日記、そして出征後戦死するまでの47日間の日記である。

万歳万歳で送られる出征者。地元で開催される渡河演習や軍事大演習に沸く人々。富廣は、満州国の建国を喜び、国際連盟総会に背を向け退席する松岡洋祐に喝采を送っている。日記には、この時代の空気があふれている。

本稿では、富廣の日記や当時の新聞をもとに、世論が

時代にどう関わったのか概観する。

この時代、主に熊本で読まれていた新聞は、民政党系の九州日日新聞と政友会系の九州新聞である。当時熊本を二分し、激しく争っていた民政党と政友会の機関紙二紙である。

## 2. 満州事変以前

1930（昭和5）年4月、ロンドンで海軍軍縮条約が締結された。1921（大正10）年のワシントン軍縮条約で規定された主力艦建造休止期限を5年延長すること、イギリス、アメリカ、日本の補助艦保有比率を100:100:69.75とすることなどが定められた。

### <新聞>

九州新聞は、日本にとって「この決定は失敗」と断じている。一方で、九州日日新聞は、この軍縮条約を好意的に受け止めている。

・九州新聞 昭和5年4月13日

社説「五国軍縮会議終結」

我が国防の要を危うくしたことは、返す返すも明確なる失敗と云うべく、之に反して仏伊がその主張を曲げないで通した事は、却って如何に一国の主張に忠実であったかを示すものと見るべきである。

・九州新聞 昭和5年4月22日

社説「五国海軍条約調印」

我が国が対米六割何分かの補助艦比率で、ロンドン海軍条約に調印することは、とりも直さず米英をしてまさかの場合日本を攻むるに便ならしめ、或いは戦わずして既に屈服の意を表するものである。

・九州日日 昭和5年4月24日

社説「海軍条約成る」

世界各国によって締結された不戦条約は、国策遂行のために戦争を為すべからずと規定している。今度のロンドン会議はこの不戦条約をその出発点と為し、不戦条約をして単に形式に終わらしめざることを期したのである。

我が国の一部にては、我が政府の所謂三大原則が貫徹されずと云って我が全権の態度を非難せんとする人もいるが、初めから我が要求だけを決めて、其の通りに行かねば直ちに会議を脱退すべしとするならば最初より会議に列する必要もない。殊に国際間の問題にては、互譲妥協が最も必要である。この精神を發揮してこそ軍縮会議の美果を収むる事を得るものである。各国頑強にその主張を固執せば会議は直ちに決裂する外はない。かくては建艦競争を誘致し、世間動乱の因を為し、国民は重大なる負担に苦しまねばならぬ。吾人は今日斯かる憂患を一掃したる海軍条約の成立を見て衷心より祝福せざるを得ない

・九州日日 昭和5年4月24日

「人類進歩途上に於ける不滅の歴史的記念塔／若槻全権の声明」

本条約は国際的協調親善を増進し依って以って今後軍備縮小の偉業を推進すべき有効なる雰囲気各国間に醸成すべきものなる事を確信するものなり。

・九州日日 昭和5年4月24日

「軍縮会議の成立は平和協調精神の勝利／幣原外相のステートメント」

ロンドン条約は参加各国全権が苦心惨憺たる努力の結晶であってこれら全権は世界各国民より深き感謝を勝ち得べき事は当然であるとともに他方吾人はこの会議をして茲に至らしめた事はこれら各国民間に存する平和及び協力精神の勝利であることを認めざるを得ないのである。

### <富廣の日記>

1930(昭和5)年、富廣は20歳。青年訓練所の生徒である。青年訓練所は、当時、16歳から20歳の青年を対象に軍事教練を行っていた。訓練所での日々が日記に綴られている。

「昭和5年10月3日 常に寝坊だが時となると勇気がでる。五時に起きいで起床ラッパを吹き、自転車車で訓練に出席した。号令調整、散兵教練などに力を振るう」

「昭和5年10月7日 母に起こされぱつと飛び起きるなり。黎明の大地の静寂を破って吹くラッパの音。おお親愛なる訓練所諸君目覚めて呉れ。陣中勤務の動作をやり元気で帰途についた」

この年の9月12、13日には熊本で渡河演習が行われている。腹痛で伏していた富廣だが、飛び起きたようだ。この渡河演習には、数百という、地元の人たちが見物に訪れている。

「昭和5年9月12日 今日は十三連隊を北軍となし、都城、廣島の二連隊を南軍とし、師団をあげての渡河演習が行われる。朝黎明から大砲の響きプロペラのうなり。病床の僕でさえなんでじっとしていられようはずがない」

「昭和5年9月13日 今日も朝からプロペラの音に騒がれ人々はなかなか浮いた調子である。薬取りに行きし時は北軍の砲台は全部退去したのであった。北軍は逃げる南軍は追う。そこにここに戦いは起こる。数百を超える見物のどよめき」

日本にとって不利な条件となった軍縮条約について、九州新聞は失敗としているが、九州日日新聞は好意的に受け止めている。この時期の言論がまだ多様性を持っていたことがわかる。

### 3. 満州事変

1931(昭和6)年9月、中国東北部の奉天郊外で、関東軍が南満州鉄道を爆破、中国軍の仕業だとして攻撃し満州事変が勃発する。これは、日本が日中戦争、それに続く太平洋戦争へ突入していく起点となった。若槻首相は「これ以上拡大せぬことを希望」、幣原外相は「地方的問題として解決されたい」と述べる一方、軍部は「この際徹底的にやれ」と戦線の拡大を叫んでいる。9月20日の九州日日新聞は、軍と政府の立場の違いを明確に示している。

### <新聞>

・九州日日 昭和6年9月20日

「日支兵の大衝突事件 奉天東大栄攻撃中の若松連隊の大苦戦 一万の敵と対峙して」

東大栄を攻撃中の若松歩兵第二十九連隊(二個大隊凡そ九百名)は凡そ一万の敵と目下交戦中であるが非常な苦戦に陥っている

政府は、事件をこれ以上拡大しない方針である。

「兵火を交えたのは当然のことと思う しかしこれ以上拡大せぬことを希望／若槻首相の談」

「事件の拡大を極力防止する／幣原外相談」

差し当たり政府としては閣議決定どおりの方針で事件の拡大を極力防止することに決し

「地方的問題として解決されたい 幣原外相 林総領事に調電」

事件の拡大を極力防止し地方的問題として至急解決方につき努力されたい

一方、軍部はこれを契機に、戦線を拡大したいとの思惑である。

「軍部だいたい空気は大部隊出動意向 この際徹底的にやれ」

軍部全体の空気は支那の官兵が集団的に満鉄を破壊するに至ってはもはや容赦の余地はない。殊に両軍の間に火ぶたが切られたのであるからこの際相当の大部隊を出動せしめて根本的に膺懲し支那の侮日的態度を根底から覆しさらに進んで満蒙諸問題の一举解決を断行しなければならぬ。

九州日日新聞は、1930（昭和5）年のロンドン海軍軍縮条約で、軍縮に賛成の立場をとり、「各国民間に存する平和及び協力精神の勝利」と述べていた。しかし、満州事変では、中国を非難し、関東軍の攻撃を正当化している。

・九州日日 昭和6年9月20日

社説「日支兵の衝突」

一部支那兵の無知にして野蛮なる、屢々非常識の事を敢えてするが、今度の行為は実に言語道断である。

・九州日日 昭和6年9月21日

社説「今後の形勢如何」

我が国が支那に対して求むるところのものは、百の巧言でなくして一の誠意である。この誠意を示さずして徒に言辞を修飾し、依然として挑戦的侮日を逞しうするのでは、これ以上我が国民の隠忍を求むることは到底不可能であり、国際的危機が愈々急を告げ来たるのは寧ろ当然とせなければならぬ。

九州新聞は、号外を出して、装甲車の進撃や奉天城への入城を写真で大々的に報じている。

・九州新聞 昭和6年9月25日

社説「今後の対満蒙策」

満蒙の地は、わが領土朝鮮及び租借地たる関東州の接收地であり、我が国の生命線とも見るべき重要地帯でありながら、過去世年近くの満蒙経営は、決して十全とは云えなかった。

「満蒙は日本の生命線」との言葉は、元満鉄副総裁の松岡洋祐が帝国議会の演説の中で発した言葉である。日清戦争、日露戦争と国民の犠牲のもとに獲得した中国の東北部、内

モンゴルの権益は何としても譲れないという主張は、村や家々から戦死者を出した国民の心を強く捉えた。

#### <富廣の日記>

「昭和7年1月15日 活動の話 満州事変。草深い野良の一本線上でも皇国を思う誠心に変わりはない」

富廣は満州事変のニュース映画を観たことを記している。この当時の国民は、新聞社が制作するニュース映画で中国戦線の様子を知り、映像の中に夫や子を探した。

多くの新聞が、軍部の行動を支持する中、大阪朝日新聞は、まずは国際理解を得ることが必要だとし、政府は軍部を統制すべきだと不拡大を主張した。

大阪朝日新聞の記事は軍部の怒りを買うことになる。在郷軍人会の不買運動が広がり、大阪朝日新聞は大きく発行部数を落とした。その後大阪朝日新聞は軍部に協力的な論調に転向する。

満州事変以降、日中戦争、太平洋戦争と、戦線が拡大するにつれ、新聞の発行部数は増えていく。

新聞の発行部数と歩調を合わせるように、世論も盛り上がりを見せていく。

満州事変の翌月、1931（昭和6）年10月10日には、熊本市公会堂で熊本県民大会が開催されている。大会には5千人が参加、中国に対する強硬路線の必要性をアピールし、熊本から世論をつくりあげていこうと氣勢を上げている。

この11月には昭和天皇を迎えて熊本で陸軍特別大演習が行われている。演習は熊本市の市街地を中心に3日間行われ、その後帯山練兵場で観閲式が行われている。新聞には、「御英姿神々しく大元帥陛下熊本御安着」「熊本駅前の広場は人と車の洪水（九州新聞 昭和6年11月12日）」との見出しが躍っている。

#### 4. 満州国建国

満州事変は、当時の幣原喜十郎外務大臣により、不拡大、局地解決の方針が示されたが、関東軍は政府の方針を無視して軍事行動を拡大、1932（昭和7）年3月には、清朝の最後の皇帝である愛新覚羅溥儀を担いで満州国を建国する。新聞は「平和の光溢るる 新国家 満蒙の大天地」（九州日日 昭和7年3月2日）、「新五色旗全満に翻り平和のや楽土全く建設成る 九州新聞 昭和7年3月2日」と建国を祝う見出しであふれている。

#### <新聞>

・九州日日新聞 昭和7年3月3日

「輝く新興国 満州の誕生」

今世紀において歴史に記録さるべき重大事件といえればひとつは欧州大戦であり、今一つは満州の荒野に建設された新

国家「大満州国」の誕生だ。云ふまでもなく満州国を誕生せしめたものは満州事変である。満州事変に対する帝国の犠牲は大きかった。がしかし満州事変は遂に有終の美を結んで、我が皇軍の忠勇なる奮闘と、我が国民の熱烈なる悲願とは、かつての日匪賊横行の満蒙の天地をして、一大理想郷たらしめることに成功したのである。

・九州日日 昭和7年3月10日

「輝く満州建国の大典 純金の国璽を受け溥儀氏執政に就任」

空は拭うたようにくっきりと澄み渡り和やかな春風に色鮮やかな五色旗が靡いている。麗らかな午後の日差しは燦燦として長春七馬路の式殿にそそいでいる。囀鳴たる奏楽の音が辺りの静寂を破って響き渡り、今にも満州建国の大典は挙げられんとしている。

### <富廣の日記>

富廣も満州国の建国を喜んでいる。

「昭和7年4月2日 おお春！霞たなびき空高くには可憐な声か。雲雀さえずり桜もつぼまんとす。吹く風も和やかに恍惚として夢のような平和な郷の眺め。満州問題も一時停滞しおだやかに満州新国家は樹立せられた。甘粕大尉、その警備局長解任ときく。おお嬉しきことよ」

この頃の新聞には、新たな市場に県産品を売り込もうと熊本の視察団が満州を訪れた記事もある、西瓜、かんきつ類、茶などが輸出品として挙げられている。また特別移民として熊本県から57人が移住するとの記事もある。球磨農業高校で1カ月研修をしたあと、8月上旬に出発するとしている。

この頃は、富廣の村からも、若者が次々と召集されていく。「昭和7年1月9日 山田初喜 台湾キイルン重砲隊付きとして出営す。川尻駅発十時四分。我が学窓の友、山田君、今日晴れて皇国の千城として懐かしの郷を立つのだ。在留青訓生一同、見送りせんと九時の規定にはせつけてみれば、気の早い下権藤の人たち早や去りし後ならん。我、訓練旗を奉持して川尻へ急いだ。不肖なる私の肩辺に翩翩として翻る。我らの和す万歳三唱。山田君の雄姿、汽車とともにかすかになった。おお故国のために大いにやれよ！我らには我らの務めがある」

「昭和7年1月10日 今日は我が最も信頼する、青訓第一の人格者田代君、晴れて十三連隊に入営だ。天晴れと言えば、未だ暗い大道を今日も旗手としての栄冠をかざして先生とともに四つ角まで行った。早や田代君はそこに我らを待っていた。送る辞送られる辞そこに一抹の風雲はあったか。国家の千城としての首途。おお友おおおいにやれよ。家のため、引いて訓練所の名のため。今こそ首途だ。大いにやれよ」

「昭和7年3月25日 濱屋に行き、政友会系九州新聞を読んだ。帝国議会及び満州事変等々。政友与党、堂々と公明正大な自由な天地を歩め。かく言ってやりたい気持ちぞする」

この日富廣が読んでいる九州新聞を読んでもみる。一面に「野党の突進を苦もなく粉碎して、満州事件費を可決。絶対多数党の威力を発揮」との大きな見出しが躍っている。富廣は大陸での戦線を拡大する軍部を強く支持しているようだ。

またこの年は5・15事件が起きている。海軍の青年将校たちが総理大臣の官邸に乱入し首相の犬養毅を殺害した。富廣の日記である。

「昭和7年5月16日 犬養首相 凶漢のためにたおる。午後五時二十分 凶漢 陸軍軍人。おおこの日、帝国政友、犬養毅氏凶漢のために倒れしとす。惜しい無実の老人を失した。白色テロ横行するや 帝国の前途や如何」

5・15事件は、この年の2月に起きた「血盟団事件」の残党によって引き起こされた。日蓮宗の僧侶、井上日召が政治結社を結成し、天皇を中心とした国家の建設を画策、共鳴する近郷の青年たちに「一人一殺」を命じて政治家や実業家の暗殺を企てた。2月に元蔵相の井上準之助が、3月に三井財閥理事長、團琢磨が狙撃されて殺された。この時期は、1936（昭和11）年の2・26事件まで、未遂も含めテロ事件が相次いでいる。

## 5. 国際連盟脱退

1931（昭和6）年の満州事変を端緒に、日本は中国への侵略をすすめ、1932（昭和7）年3月に、傀儡政権である満州国を建国した。中国の提訴により国際連盟は、イギリス人のリットン卿を代表とする調査団を満州に派遣した。1932（昭和7）年10月、代表団は報告書を提出、日本の行為を侵略であるとし、自衛とは認められないとした。これに対し日本の各新聞は反発、満州の権益を主張した。

### 5-1 国連 報告書発表

#### <新聞>

・九州日日 昭和7年10月3日

「世界の視聴を集めて連盟報告書公表さる」  
九月十八日の行動は自衛手段と認めず

・九州新聞 昭和8年2月16日

社説「無礼極まる勧告報告案」

今日に於て既に連盟と我が国との正面衝突は、愈々免れなくなった。否今日に於て我が国と連盟とは正面衝突している。而して残るは只そこに至る手続きのみにして、同時にわが国民の覚悟も又、決定し得るれば、我が国としては些かも憂う事ないのみか、寧ろ一日も早く連盟の陰険なる空気

より離脱すべく、其の脱退の日の遙かならん事を希望するのみである。

## 5-2 共同宣言

そんな中、新聞は、132社の連名で共同宣言を発表する。宣言は、日本が満州の権益を守ることは当然であるとし、連盟の提言を断じて受け入れるべきではないと「宣言」している。このあと新聞各社は連盟脱退を叫ぶようになる。

### <新聞>

・九州日日 昭和7年12月19日

#### 共同宣言

「東洋平和の保全を自己の崇高なる使命と信じ且つ茲に最大の利害を有する日本が国民を挙げて満州国を支持するの決意を為した事は誠に理の当然といわなければならぬ」

「満州国の厳然たる存立を危うするが如き解決案は、たとひ如何なる事情、如何なる背景に於いて、提起さるるを問わず、断じて受諾すべきものにあらざる事を日本言論機関の名に於いて茲に明確に声明するものである」

宣言に名を連ねる九州日日新聞は、2年前には、ロンドン軍縮会議で、たとえ日本に不利でも条約を受け入れるべきで、最も大事なのは世界平和であると述べていた。わずかな期間で一転、自国の権益を強硬に主張するようになった。

そして1933(昭和8)年2月、政府は国連脱退を閣議決定する。新聞の社説には、満州の権益の重大さが強調されている。

・九州新聞 昭和8年2月22日

#### 社説「連盟脱退の廟議決定」

吾人は今にして、明治廿七八年戦役以来、明治卅七八年戦役、及び一昨年九月十八日満州事変勃発以来、幾多鋒滴と化したる、我が同胞を想起せざるを得ない。幾十萬の同胞は、何が故に護国の鬼と化したるか、幾十億の蹂躪は、何が故に霧消されたるか、云ふまでもなく東洋永遠の平和を確立して、帝国の使命を完うせんが為である。而して今や実に其の清算期に臨んでいる、然らば即ち能く其の清算を為すは、幾多鋒滴と化したる、前人に対する現代国民の一大責任にして、此の責任を完うしてこそ、初めて前人に対し得るのである。満州事変の勃発するや、国民が一致団結して、銃後の援助に努め、満州国の建設せらるるや、挙って其の早期承認を叫び、更に連盟の空気悪化するや、其の脱退を呼号するに至りしもの、皆是れ其の清算の責任を果たさんが為である

この九州新聞の記事では、満州事変以降、いかに日本が多く戦死者を出し犠牲を払ってきたかが強調されている。メディアと国民の声は呼応して大きな渦となり、戦時体制を支えることになる。

## 5-3 国連決議案採択

1933(昭和8)年2月、国策連盟総会が開かれ報告書に対し採決が行われた。賛成42、反対1、棄権1となり、国際社会の意思が示された。反対は日本のみであった。松岡洋祐主席全権は、議場を退席する。また、この時期、日本軍は熱河省に残る張学良軍を排除するとして、熱河作戦を実行した。

### <新聞>

・九州新聞 昭和8年2月26日

#### 社説「一対四十二 寧ろ晴々した」

吾人は既に連盟の陰鬱なる雰囲気に飽き飽きした。然るに今其の陰鬱なる空气中より脱し得て、自由の立場に立つに至りたるに就いて、恰も荊冠を出でて、喬木に移りたる感なきを得ない。

### <富廣の日記>

「昭和8年2月25日 国際連盟総会四十二対一。我が松岡首席全権は『花は櫻木人は武士日本人の最後は潔いもので』との意気ある言葉を後に一路故国に帰る。満州に於いては張学良の為しとせられた熱河首長への玉杯が反旗をひるがえした先を一掃すべく日満両軍まして鬼第六師団の精鋭揃い 赴くところ連戦連勝熱河の大半を攻略したのも是の日なるぞ。是の際、如何なる国際間が問題と成っても、飽く迄日本と満州は提携して世界各国を相手に。なんの経済の小ささ、恐るに足らずだ。歩調揃えて世界の大道直往邁進だ」

## 5-4 連盟脱退

政府は、連盟脱退の詔書を発表、1920(大正10)年の創設時から常任理事国として関わってきた国際連盟に対して脱退を通告する。

### <新聞>

・九州日日 昭和8年3月28日

#### 「帝国政府きのう連盟に脱退通告を發す」

茲に帝国政府は平和維持の方策殊に東洋平和確立の根本方針につき連盟と全然その所信を異にすることを確認せり、依って帝国政府は此上連盟と協力するの余地なきを信じ連盟規約第一条第三項に基づき、帝国が国際連盟より脱退する事を通告するものなり」

・九州日日 昭和8年3月29日

#### 社説「連盟脱退の詔書を拝して」

世界平和の大義に基づいて執りたる我が国の行動が、遺憾ながら連盟の理解するところとならず、我が国が最初より抱懐する信念のために、敢て連盟を去って孤立するに至ったことは、日本帝国としても日本国民としても、国際的に好

個の試練時代に入りたるものであって、「思うことつらぬかずしてやまぬ」我が日本民族が、この難局に處し非常時に際會して、國際正義のために平和人道の為に、如何に堅持し如何に邁進するか、謹みて聖旨を体して益々国威を世界に輝かしむることに、國民奮って不退転の勇猛進を振り起さねばならぬ。

## 6 松岡帰国

### <新聞>

九州日日新聞は、松岡洋祐が帰国の途上で、「脱退の責任を國民の前に謝罪する覚悟」だったと伝えている。

・九州日日 昭和8年4月15日

「松岡代表 桑港出帆 晴の帰朝の途に就く『脱退の責任を國民の前に謝罪する覚悟』と語る」

しかし、帰国した松岡を待っていたのは、國民の熱狂的な歓迎だった。松岡は一躍、時のヒーローとなった。

・九州日日 昭和8年4月28日

「松岡代表帰る」「横浜埠頭に描く感激の歴史的光景 晴れやかな凱旋將軍の面持で故国の土を踏む」

「凱旋列車で歓呼裡に帝都入り 熱誠な國民的大歓迎」

松岡代表一行並びに歓迎の人々を乗せた特別仕立ての凱旋列車は帝都をさしてひた走りに走る。沿道の各駅には団体旗を押し立てた小学生等の歓呼を浴びて列車は午後三時五分東京駅に入るや待ちかねた歓迎の群衆の内から「松岡全権万歳万歳」の聲が駅頭を揺るがせた。

この年の新聞を概略する。

この1933（昭和8）年の9月18日は、満州事変からちょうど2年。熊本の新聞は、藤崎台の招魂社で慰霊祭が開催されたことを報じている。「参列者実に三万余名 湧き起こる愛国至誠の大感激 九州新聞 昭和8年9月19日」「我生命線確保の破邪隆魔の聖戦 牢記せよ 忘るるなきよりの記念日 九州日日新聞 昭和8年9月18日」

またこの時期は、第六師団が満州から熊本に凱旋する時期が近づいている。新聞社は「第六師団の凱旋を歓迎する」というタイトルで、懸賞綴り方を募集したり六師団の写真集を発刊したりしている。また新たに「第六師団行進曲」もつくられ招魂社で奉告式が行われている。開催された翌日の新聞を見ると、大勢の人たちがつめかけ熱狂した様子が報じられている。

「第六師団行進曲 厳かに完成奉告 盛大なる式典執行さる 神域にこだまして英魂も恍惚となる」「記録的超満員感激だ！興奮だ！爆発する大拍手 四千の大群衆熱狂し見よ！この殺人的な大盛況 九州新聞 昭和8年9月11日」

新聞は六師団凱旋の日程も逐一大きく報道している。「陸軍省発表 六師団の凱旋は来る二十五、二十六日頃開始、十月上旬終了の予定 九州新聞 昭和8年9月8日」

紙面には、凱旋する六師団幹部十三人の写真が掲載され、山田珠一熊本市長が「六師団の凱旋誠に慶祝に堪えぬ」とコメントしている。

そして10月1日、熊本駅で六師団の凱旋が行われている。この日の新聞は「祝凱旋」として、熊本県内の個人や企業が広告に名を連ねている。

そして新聞は凱旋を大きく報じている。「列車到着の一刹那、颯と湧き起こる万歳の嵐！おお駅頭の感激的情景 九州新聞 昭和8年10月1日」「軍国の秋 空高く海に丘に歓呼の渦巻 九州日日新聞 昭和8年10月1日」「待った！！ 還った！！ 勲功高き我らが兵勇 熊本駅頭感激の嵐 九州日日新聞 昭和8年10月2日」

陸軍の星印の下に「歓迎」と書かれた大きな立て看板。「凱旋」と書かれた何本もの幟。そこに群衆が詰めかけている。中折れ帽や麦わら帽をかぶった男性。赤ん坊を背負った女性。駅前の広場は人でごった返し、大変な熱気が伝わってくる。

そして、その熱気と歩調を合わせるように、新聞には「名譽の戦死者」を伝える記事も増えていく。

富廣はこの日の凱旋を日記に記している。

「昭和8年10月1日 今日この日は、北満、あるいは熱河に幾多赫確たる戦績をたてし我が銀城の勇士は晴れの郷土へおとずれた。午後三時三十分、殷々たる驚砲によって、熱血あふれる歓喜の波の心耳に響く」

この年10月6日には、熱河から帰還した友人を出迎えに川尻駅まで赴いている。

「昭和8年10月6日 行く裡に同志を呼び駅頭では待つこと久し 熱河の戦塵にまみれし彼の顔色浅黒く眼光鋭く今日の駅頭での群衆への挨拶は上出来だった。分会長の挨拶に和して駅頭はわきかえり 一同勇者の後を襲う」

## 6. おわりに

満州事変前後の新聞報道や、井上富廣の日記をもとに世論と時代との関わりを概観してきた。1930（昭和5）年のロンドン海軍軍縮会議までは、九州新聞が、この条約が失敗であると断じる一方で、九州日日新聞が自国の権利より世界平和を希求するとの論陣を張るなど、多様な意見が存在していた。しかし1931（昭和6）年の満州事変から、その多様性が失われていった。この頃頻りに喧伝された言葉が「満蒙は日本の生命線」。元南満州鉄道副総裁の松岡洋祐が帝国議会で発した言葉だが、新聞もこれに同調、日清戦争、日露戦争で多くの戦死者を出して手に入れた満州は死守しなければならないと力説した。この言葉は、村から家庭から、戦死者を出した人々の心に強く響いた。熊本では満州事変が起こった翌月、五千人が参加して県民大会が開かれ、中国に対し、強硬路線をとるべきだと氣勢を上げている。

満州事変勃発時には、政府は不拡大の方針だったが、軍は

戦線の拡大を叫び、その後上海でも中国と軍事衝突する。

その背景には、国民の支持があった。当初、戦線拡大に懐疑的だった大阪朝日新聞も、在郷軍人会の不買運動などもあって、軍に協力する論調に転向している。新聞の発行部数は、満州事変以降、急激に伸びていく。

そして、新聞 132 社は、日本が満州権益を守ることは当然のことで、断じて国際連盟の提言を受け入れるべきではない、とする共同宣言を発することになる。わずか 2 年前のロンドン軍縮会議で、自国のみにとらわれず、世界の平和を考えるべきだという論陣を張っていた九州日日新聞もこれに加わっている。

村から次々に出征していく若者。それを万歳万歳と見送る人たち。井上富廣も、彼らを見ながら心が高揚している。富廣の日記を読むと、当時の新聞の論調と完全に呼応していることを感じる。村々で行われる渡河演習や陸軍特別大演習には、多くの見物人が詰めかけた。満州から熊本への凱旋では、熊本駅は多くの人でごった返した。

満州国の建国、国際連盟からの脱退と、メディアと一体となって日本は戦争への道を突き進んだ。そしてその背後には、それを支持し、火に油を注ぐような国民の熱狂があったと言えるだろう。

#### <参考文献>

1. 九州新聞 1930～1932 年
2. 九州日日新聞 1930～1932 年
3. 井上佳子『戦地巡歴・我が祖父の声を聴く』、2018、弦書房